

市民研 news 10



市民環境研究所

法人格を活用した展開を

石田紀郎（市民環境研究所代表理事）

6月20日午後1時30分から、左京区吉田にある芝蘭会館別館で、会員14名の出席(委任状26名)のもと、定款規定を満たして総会を開催しました。議事録記載の第1号から第4号までの議案が審議され、可決されました。司会は理事の水口保さん、議長は当会員の小林純一郎さん、議案提案者は理事の和泉寛津子さんでした。

この1年間の活動は決して活発とは言えず、事業の中心である「環境塾」の開催も1シリーズ（3回）のみと少なく、新年度からは初心に戻って複数シリーズを開催したいものです。「ミニ環境塾」は、取り上げたテーマも「裁判員制度」や「アフガニスタン問題」など多彩であり、開催も気楽にできることから、新年度も大いに開きたいと思っております。

この他に、「地球環境基金」の活動助成を受けて日本カザフ研究会

が中心に実施している「アラルの森プロジェクト（アラル海旧湖底沙漠での植林）」なども、NPO法人であればこそ獲得できた資金であります。また、会計年度は次年度になりますが、農水省の事業である「田舎で働き隊」プロジェクトの研修生を受け入れ、和歌山のミカン園での農業研修を3月に実施しました。これも、NPO法人ならではの事業で、法人格を大いに活用した事業を今後も展開していきたいものです。

経理面は相変わらず借入金で賄っている不健全な収支の状況であります。会員数の増加を図りながら、事業収入も増やさなければなりませんので、会員諸氏からの企画提案と事業実施をお願いする次第です。また、事務所の共同使用・活用を支えてくださる団体会



員や個人会員を募集していますのでご協力をお願いします。

総会終了後、「ごみ、農、環境教育」と題して、石川県立大学教授の高月紘さんに講演していただきました。高月さんは衛生工学分野の研究者でしたが、現在は農学部にも所属し、農を実践する中でごみ（廃棄物・有機物）問題に取り組んでおられます。工学の限界を超え、ものとしての農と農学分野への進出によって、新たな地平を開拓されつつあると感じました。

ニ環境塾

第6回

若者が見たカザフスタン

10月22日 (木)

加藤りよさん/湯谷啓明さん (京都大学農学部4回生)

まとめ:水口保



今回はサロン中央アジアとの共催で、最近カザフスタンに滞在した2人の若者に最新事情を語ってもらった。

最初に登場した加藤りよさんは、2009年7月20日から8月27日までアイシックジャパン・海外インターンで、サマーキャンプのボランティアスタッフとして、カザフスタン最大の都市アルマティに滞在した。出国前はアフガニスタンと勘違いされ、テロに巻き込まれるのではないかと心配されたが、幸い何事もなし。しかし、現地ではパスポートは常に携帯し、町では英語を大声でしゃべらないよう注意されるなど、治安は必ずしも安定はしていないことをひしひしと感じたようだ。

生活面で感じたことはまず、「世界一肉を食べる国」を自称するとおりよく肉を食べること。脂っこいのが苦手なので少々辟易気味。



お菓子はまるで砂糖のかたまりで、毎日胃薬のお世話になっていた。それから、カザフ人は非常にタフだということ。毎週のように山に登るし、酒を毎日のように飲むではダンスに興じていた。

人種的にはカザフ人が最も多く次いでロシア人だが主要言語はロシア語で、カザフ語は学校では習うものの、せいぜい挨拶程度しか使われていないようだ。以下、加藤さんが感じたカザフの印象。

- ・舌打ちする人がとても多い
- ・道路に平気でつばを吐く
- ・若者は背が高くフレンドリー
- ・運転が乱暴
- ・排気ガスの影響で空気が汚い
- ・接客態度が横柄 等々。

アルマティの人口は約120万人、オイルマネーで大胆なデザインのビルが建ち並び、遅々たる歩みだが地下鉄工事も進み、2011年冬期アジア大会に備えて、諸所で建



設工事が進んでいた。

一方、湯谷さんは2008年9月に2週間、アルマティから汽車で30時間くらいかかるアラリスクに滞在した。目的はアラル海の「今」を自分の目で確かめること。アラリスクは元は港町であったがその面影はなく、案内してくれた人も、自分は沙漠生まれだと語っていたとか。実際、アラル海の砂漠化は著しく、砂地に残る廃船は鉄くずと化していた。解体の具合は鉄の相場に左右されるのだそうだ。塩分が多いため草は生えにくい、わずかにある草地にはプレーリードッグらしい姿も見え、早くも陸の生態系が形成されている印象を受けたという。

※

二人のキャラクターや滞在した空間が異なるため、印象の違いもかえって興味深く、カザフスタンの多様な様相がうかがい知れた。



健康を脅かす電磁波

～IHなど家庭電化製品は安全か～

12月5日(土)

荻野晃也さん(電磁波環境研究所所長)

まとめ:和泉賀津子

土曜日の午後の時間帯にもかかわらず、講師を含め20名の参加があり、電磁波に対する関心の高さがうかがえました。荻野先生は、これまで発表されている多くの研究論文などを提示しながら、電磁波に関する詳しい内容のお話をいただきました。ここでは、当日配っていただいた資料をもとに、お話の内容をまとめてみました。

■電磁波とは何か?

電磁波とは、太陽光線の中間で、エネルギーの高いものが原発や原爆で知られるガンマー線などの「電離放射線」で、エネルギーの弱いものが「電波」と呼ばれる「非電離放射線」です。もちろん、紫外線も赤外線も電磁波の仲間です。粒子と波の両方の性質があり、電波領域では電気や磁気が波として空間を伝播していると考えることができます。

家庭の電気は、低周波でエネルギーが極めて弱く波長が長いものです。ケータイやケータイタワー、放送タワーのアンテナから放射される電磁波は、高周波と低周波が混ぜ合わされたり圧縮されたりしているアナログ波またはデジタル波なので、高周波と低周波両方の悪影響の可能性があります。また、周波数によって性質が大きく変化するので、「エネルギーの高い電磁波のみが危険」とはいえないという研究成果が増えてきたことが、電磁波問題が浮上した最大の原因です。

電磁波被爆が広まったのは、第二次世界大戦後にテレビやラジオをはじめとした電化製品が大々的

に登場してきてからで、外国では1970年代に電磁波問題の論文が発表されています。しかし日本では、2003年にやっと発表された電磁波と小児白血病の研究論文も、政府が「信用できない」と無視してしまうような状態でした。

■身の回りの電磁波と危険性

私たちの身の回りにある電磁波の多くは極低周波で、高周波は電子レンジとケータイだけです。2009年10月末の日本のケータイ台数は、11,428万台、普及率は89.5%にもものぼり、今や残る購買対象は小学生だけという状態です。世界中では30億台にもなっていて、住宅の近くにもケータイタワーが乱立しています。電磁波の問題は何も子供だけの問題ではないのですが、「便利さ」に負けてしまっている現状です。

1996年以降、電力会社のオール電化の大キャンペーンも始まり、「電磁波の危険性」が一般によく知られている欧米では「電気使用は控えよう」としているのに、日本では逆です。荻野先生が電磁調理器で一番心配することは、子供の「脳」、女性の「流産」、お年寄りの「痴呆症」への影響だそうです。カリフォルニア州では、2002年に「低周波磁界・被曝と流産リスク」に関する疫学研究が発表されています。送電線の近くでは「アルツハイマー病」が増加しているというスイスの研究も2009年に発表されました。「電磁波は安全だ」として、子供や赤ちゃんまで被曝させているこの日本の現状は、まるで人体実験をして

環境塾

第7回

いるように感じられるそうです。

子供のケータイ使用で心配になるのは、ケータイ電磁波が子供の頭の中は侵入しやすいことで、頭がまだ小さく頭蓋骨が薄く水分が多い子供にはかなり危険と言えます。最近になって、日本政府も欧米並みに子供のケータイ使用を控えるよう勧告していますが、「誘惑やいじめなどから子供を守る」ことを目的としていて、電磁波の危険性を心配しているわけではありません。その点が欧米との大きな相違です。90年に命名された電磁波過敏症も、増加する一方です。

■電磁波から身を守るには

低周波の電磁波から身を守るには、①発生源を弱くする ②発生源から距離を取る ③途中で減少させる(遮蔽する)などが考えられます。住宅内で電磁波の強い場所は、①電源ブレーカー ②台所の電化製品 ③電化製品の裏側 ④電気毛布・電気カーペット・こたつ・電子レンジ ⑤モーターの部分 ⑥IH電磁調理器や電気床暖房 ⑦壁の中の配線などですが、少し注意することでかなりの被曝量を減らすことができます。

今「危険な可能性がある限り、安全性が確認されるまでは排除しよう」の流れが世界中で広がっています。電磁波だけではなく、「危険が100%確定した」とは言えなくても、「危険である可能性が高い」と考えられる場合には、EU諸国が始めているように子供や胎児の立場を重視して「予防原則」思考で厳しく対処する必要があると、荻野先生は強調されました。

国際交流を通じて環境問題を学ぶ 日本環境保護国際交流会 (J.E.E.)



ゆるやかな組織でゆっくり活動

日本環境保護国際交流会は、22年くらい前に京都大学へ留学していたアメリカ人たちが立ち上げたグループで、英語名はJapan Environmental Exchangeといいます。環境問題の情報を提供し合い学生同士も交流して、環境問題を学び啓発活動をしていこうということで始まりました。

当時の会員は英語圏メンバーが250名くらいと数人の日本人で、勉強会やごみ拾いを兼ねたハイキング、熱帯雨林週間のパレードなどをしていました。活動費がなくなると、パーティをしたり、加茂川をマラソンして誰が勝つかを賭けそのお金を活動費にカンパする、というような形でした。

私は、買い物をするとき渡されるレジ袋を手にするたびに、プラスチックって燃やすとどうなるのだろう？ どんな害が出るのだろう？ と知りたかったところどこにも情報がなくて、J.E.E.で勉強会があるのを知り、それをきっかけに入会したのです。勉強会はいつも喫茶店で行われていて、事務所を持てるようになったのは最近のことです。

そのころすでに、マイバッグにマ

イ箸、マイ水筒を持ち歩いているメンバーばかりでした。外国の方が古い着物から作った箸袋を持ち歩くなんて、日本人より日本人らしい、と驚いたものです。

現在は日本人と数人の外国人会員の60余名の小さなグループになってしまい、活動もゆっくりですが、外国の方との交流も多く、それがJ.E.E.らしさだと思っています。

ある日、アメリカ人のマダムが暗くなった事務所へ訪ねて来てくださったことがありました。「私は明日帰国するが、その前にどうしてもJ.E.E.を訪ねてみたかった。私のおばあさんは牛乳瓶を何度も使うよう、行政や企業に言い続け、ビンのリユース制を実現させ、この制度を設けた最初の州となった。J.E.E.も活動をごんぼってください」と。

また、「もうすぐ国へ帰るけど、加茂川でごみ拾いをしたいし、歩いている人にアンケートも取りたい」という若者の依頼をうけて一緒にアンケート調査をしたことなどもあります。

環境カレンダーをよろしく！

なんといっても、一番大きな活動は、「J.E.E.環境カレンダー」の作成です。毎日目にするカレンダーを通じて環境意識を高めてほしい、という思いで作り始め、今年はもう19年目です。

絵は会のメンバーである高月紘先生（貴会の石田先生と親しくしておられる京大名誉教授、現在は石川県立大学教授）が俳夢雲（ハイムーン）という雅号で描いてくださっています。的確でわかりやすく、そして

ほのぼのとした優しさあふれる絵です。日本語と英語併記で、英訳はケン・ロジャーズ氏が担当して下さり、海外へも送っています。ふつうのカレンダーと異なり、環境の記念日を載せたオリジナルなものですので皆様もどうぞ使ってみてください。

また、高月先生は漫画家としてもごみに関する絵本やまんがを出版しておられるので、その英語版をJ.E.E.から出版したり、ハイムーン漫画展を日本各地やイギリス、中国でも開き、先生を講師に“ごどもまんがワークショップ”なども毎年開いています。

その他、アースデイ・ハイキング、毎月の地域のごみ拾い、子供向け「環境人形劇」「環境紙芝居」「リサイクル工作」などの活動をしなが、会の目的である環境教育を目指しています。

これを機にJ.E.E.ともどうぞよろしくお付き合いくださいますように、お願いいたします。

(事務局責任者・細木京子 記)

info@jeeeco.org

http://www.jeeeco.org



2010年版 環境カレンダー

(壁掛け式、カラー印刷、A4判見開き28ページ。日本語・英語併記)

¥900

付録：エコはがき2枚

お申し込みは事務局まで

| 市民研の仲間たち【ハリーナ】

⑨ |

ネットワークが生まれるスペース キッチン・ハリーナ



「ハリーナ」は「おいでよ！」

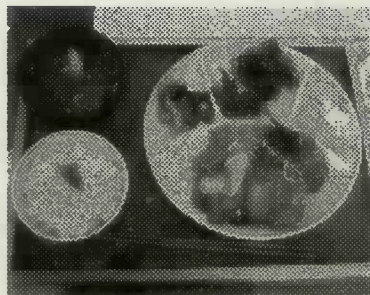
キッチン・ハリーナは市民研から北にまっすぐ、左京消防署の斜め向かいにあるごはん屋です。オープンが1993年ですからもう6年になります。フィリピンの言葉で「おいでよ」という意味の「ハリーナ」が大切にしていることは、楽しく働こうということ、いいとこ取りをしないということです。そんな私が楽しく料理をするための必要条件是、まず作り手や生産の過程ができるだけわかっている食材を使うこと。野菜・肉・魚はできるだけ丸ごと使い、捨てる部分を最小限にすること。合成添加物を避けるため加工食品の使用は最小限にして、できるだけ手作りすること、などなど。

起業のきっかけは生協エルコープ(当時石田氏が理事長でした)の理事をしていたときに参加した二度のフィリピン・ネグロス訪問でした。バナナの生産地を訪ね、民衆交易のバナナが誕生するまでの苦難とその後の紆余曲折の道程を知りました。一方でネグロスに身を置いたとき、逆に日本での私自身の姿が映し出されたような気がしました。たった2週間の旅だったのに宿願が与えられたような気分

が持続しました。生協活動は本当に安全、安心なものを求めるだけでいいのか？ お金と知識さえあれば選択できる安全とは？ 作り手の暮らしや環境への想像力を欠いたまま自分の家族の健康を守ろうとすることへの疑問。多様な選択肢の中で、かなり全うな選び方をしていると思っていた私の中のブランド志向にも気づかされました。

食が世界への扉を開く

私たちは本当の意味で自由な選択肢を持ちえていないと思い始めたのは旅がきっかけでした。特に食に関してはグローバル化により種子産業をはじめ大型流通を担う大規模農業が世界の食糧の過半数を占めている現状があります。オーガニックやフェアトレード、それだけを絶対視するこ



とは安易に過ぎると思います。それよりも、不均等で誰かに操られているような経済構造はあっても、自分の感性や生活に合うように作り変えていこうとするオルタナティブな考え方をもち、人任せにせず、自分を表現する場を作れないものか？ やってみたいと言う思いがわいてきました。

それから6年。老若男女、本当に赤ちゃんからお年寄りまで実に幅広い年齢層の方がお店を訪ねてくださいます。人は一人ひとりがユニークでかけがえのない存在だということに気づかされる毎日です。狭いスペースが幸いして、何気ない会話が世代間の交流やさまざまな企画につながったりと、ネットワークが生まれています。

自分が大切にしたいことをそのまま経営に生かすのは大変ですが、「食」が健康を守り、人の心を開き、世界への扉を開くかもしれないと希望を持ちながらキッチンに立っています。(佐藤友子 記)



里の前
だより

四季が崩れる？

石田紀郎

夏が終わらないままに10月になり、秋が終わらないままに師走も半ばとなった。異常な気象の連続で2009年も過ぎてゆく。秋の市民環境研究所は他の季節とは違って活気を帯び、夜遅くまで灯がともり、人の出入りも多い。

当NPOの団体会員で、この事務所を拠点にして活動している「農業ゼミ」の「省農業ミカン」販売活動の諸作業が続く。和歌山県海南市下津町で、省農業農法で栽培されているミカンのほぼ全量を農業ゼミが販売しているから、10月半ばに発送した宣伝ビラを見ての注文受付が11月末までで、販売は12月初旬である。素人集団の商売であり、年々メンバーが変わっていくから、手

際よいとは言えないが、1500箱以上のミカン売りさばくのだから、たいしたものである。10kg箱だから総量15トンの荷さばきである。小さな八百屋さん以上の商いを20年以上も続けているので、それなりのノウハウも顧客もあるが、年々の自然環境と社会環境の変化はこの商いにも影響を及ぼしてくる。

今年の問題点は、大豊作で全量売りつくせなかったことと、秋の高温である。ミカンは木から収穫したあとは山の小屋に貯蔵し、順次箱詰めをして出荷するが、この秋の高温は貯蔵中の腐敗と箱詰め後の腐敗の双方を引き起こしてくれた。緑色のカビが、大量の胞子をまき散らしてくれるから、宅配便での輸送中とて安心できない。1箱に7~8個の被害なら購買者に損にならないように多めにミカンを入れているが、それでも気分はよくないはずである。怒りの電話にゼミメンバーは対応している。聞けば、野菜も季節はずれの害虫に襲われているという。地球温暖化は着実に進行し、農業全体の見直しにまでおよんでいる。コタツとミカンがセットで冬を感じてきた日本の四季も崩れて来たと再認識した秋である。

BOOK REVIEW

「白いからす」

作/ほんまわか

自由国民社発行 1500円

物語は、一羽の黒いからすが、平和な国を求めて旅に出るというものですが、その旅の途中で、戦争で悲惨な状況にさらされている子どもたちを目の当たりにし、心を痛めます。でも、平和な国があると信じて飛び続け、ついには自らが平和を運ぶ白いからすになるというお話です。

描かれているテーマは、とても重いものですが、かわいいタッチの絵がそのテーマをやさしく包んでいます。この絵本を描くきっかけになったこととして、作者は「アメリカがテロとの戦いだとしてイラクへ激し

い攻撃を加えていた頃、後方支援に向かう日本の自衛隊が家族に見送られる映像を見た時でした。「日本もこのままでは戦争をする国になってしまう」そんな不安に襲われました。その時『描くのは今しかない』と思いました」と語っています。平和を願う作者の深い思いが伝わります。

作者のほんまわかさんは、京都大学在学中は文化人類学講座に所属しておられました。そのころ、市民環境研究所も少なからずお世話になり、市民研を立ち上げたときに作った看板は、彼女の知り合いのイラストレーターさんに描いていただいたものです。その後彼女は、昔からの夢であった絵本作家の道に進まれ、絵本コンクールなどの入賞を経て、今回絵本作家としてデビューされました。

絵本の世界は夢にあふれた優しい

世界ですが、今の時代、絵本を作ったこと出版してもらえるということは、非常に難しいことなの

だと思います。そんな厳しい絵本作家の道を歩んでいる彼女にエールを送りたいと思います。今彼女は、つれあいさんと8匹のネコとともに、三重県の静かな町で暮らしています。これからも、子どもたちに夢と希望を運ぶ絵本をたくさん描いてほしいと思います。(和泉加津子)



【年会費 (1口)】

- 正会員 (1口以上)
 - 個人: 5,000円、学生: 3,000円
 - 団体: 20,000円
- 賛助会員 (3口以上)
 - 個人: 1,000円、団体: 10,000円

NPO法人 市民環境研究所
〒606-8227 京都市左京区田中里ノ前21 石川ビル305
Tel & Fax 075-711-4832
[E-mail] pie@zpost.plala.or.jp
<http://www.13.plala.or.jp/npo-pie/index.html>